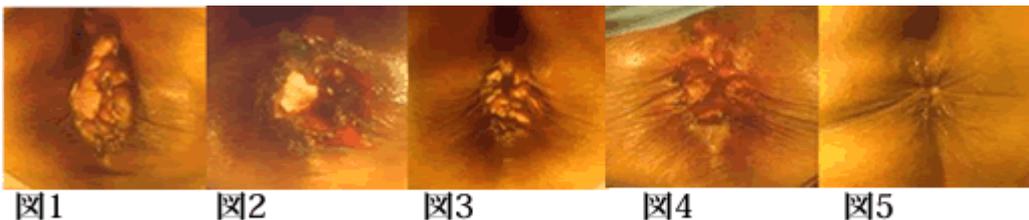


# どんなにひどい痔核も2回に分ければ治療可能です

痔核のなかには何十年も年期の入った高度の全周性内外痔核症例があります。患者さん自身も治らないものと諦めている方もいますし、肛門専門医も治療に当惑することがあります。小さな病変まで含めて全周性に一次的に手術を試みると過大侵襲となるだけでなく、肛門狭窄やいわゆる硬い肛門となり不定愁訴が生じかねません。肛門は非常にデリケートな部分であり、いったん生じた合併症は取り返しがつかず、もとはもどりません(まさしく過ぎたるは及ばざるがごとし)。当院ではかなりひどい痔核に対しては安全を第一に考え、無理をせず、2回に分割することも念頭に入れて治療を工夫しています。

## 症例呈示

51歳、女性。4年前より排便時痔核の脱出あり、用手還納していた。1か月前より常に脱出し、肛門不快が強くなり近医受診し手術を勧められたが1か月以上の入院が必要といわれた。また別の肛門科では手術はできないので紹介するといわれた。肛門には3から4度の全周性内痔核と広範な全周性外痔核を認めた(図1)。十分なインフォームドコンセントを行い分割手術を行うこととした。1回目は内痔核に対して3か所(5時、8時、11時)の結紮切除術と3か所(7時、9時、12時)の輪ゴム結紮術を行い、外痔核に対しては小さいものを含めて5か所切除した(図2)。術後肛門不快は完全にとれず、初回術後3か月目に2回目の手術を行った。肛門は全周性の外痔核と3時方向の内痔核を認めた(図3)。1か所(3時)の輪ゴム結紮と7か所の外痔核(skin tag含む)切除を行った(図4)。術後2カ月で症状なく軽快した(図5)。



(岩川和秀ほか:全周性内外痔核に対する分割手術、日本大腸肛門病学会雑誌 56:362-364、2003)